

科学研究費成果報告書「日本近代史料情報機関設立の具体化に関する研究」（基盤研究
(B) (1)、平成 11・12 年度、代表者伊藤隆、課題番号：11490010) より

1 中野 実氏

なかの みのる 東京大学史史料室・助手

日 時：1999年6月10日

出席者：伊藤隆 季武嘉也 中見立夫 梶田明宏 伊藤光一 矢野信幸 小宮一夫
小池聖一 武田知己

伊藤 本年度の最初として、東京大学史史料室の中野さんをお願いをいたしました。今回は7月に波多野澄雄さんをお願いいたしました。彼の都合がありますので日取りはまたということで、早速始めることになりました。

実は私、この間、中野さんの出しておられる『かわら版』というのをいただいて見ておりましたら、あらら、私の知らない史料のことが書いてあるということでありましたので、前からちょっとお願いしようと思っていたんですが、ちょうどいいきっかけとなると思いまして、中野さんにお話しただこうということになったわけです。

もうすでに皆さんのお手許に配られているレジュメを見ますと、これは大変な内容のあるお話だなということで楽しみにしております。よろしく願いいたします。時間は無制限1本勝負ですので、ずっとお話しただいて構いません（笑）。途中でいろいろ口を挟ませていただきますが、よろしく願いいたします。

中野 いまご紹介いただきました、東京大学史史料室の中野といたします。

伊藤先生からのお話なんですけども、それは安倍能成の文書についてちょっと紹介したものがあまして、史料というのはみればあるものだな、あるいは逆に言えば忘れるものだなと思ったんです。その史料は東大の百年史をやっている頃に集めたもので、かれころ15年ぐらいになるんでしょうか。それをたまたま紹介する者がいたら、早速、伊藤先生からご連絡があって「あれは何じゃいな」という話でした。私は、それを紹介する人間から「これはなんですか」と言われたときに、「いや、伊藤先生かなんかが集めて、編集室に備えつけておいたんじゃないかな」と答えていました。そのご本人から電話がかかってきて、「あれはどういうことなんですか」ということになって、社会科学研究所のほうにちょっと調べにまいりました。安倍能成文書は31冊あります。原文書が製本されて残っていて、31冊目は目録です。昭和53年の3月に登記したというんですね。ですから、けっこう早い時期に百年史ではコピーしたんだろうと思います。司書の方に「なにか由来とか

経緯を記したものはないか」とお聞きしましたら「何もない」と言うんですね。「何もないというのはどういうことなんですか」というと、「重要史料として扱ってないことですね」という返事でした（笑）。

中身には入れませんが、私は教育史および高等教育史専攻なので、関係する中等教育あるいは帝国大学の講座改正とか閣議関係の史料もありまして、これからちょっと本腰を入れてやらなきゃいけない史料だろうという印象を持ちました。時期は昭和20年から28年、30年前後ぐらいの議会、閣議関係史料、枢府の関係綴、憲法改正法案、憲法改正関連史料、それから教育、教育刷新委員会、教科書関係雑綴と、目次をみましたらそんな見出しがついて、それぞれに史料が分類されていました。

「灯台下暗し」というか（笑）、私は十数年間も背表紙は知っていたんですが、誰かが使いたいときには伊藤先生に聞けば何か分かるだろうと思っていた史料であります。安倍文書がきっかけになりまして、お呼びがかかりました。大変な役回りなんです。いまちょっとご紹介がありましたように、はじめにいくつかの限定をさせていただきたいと思いました。

ひとつは、私は高等教育・大学史が専門です。教育関係といいますと、最近はちょっと変わってきましたけど、基本的には初等教育が中心なんですね。初等教育ですと、教科書とかあるいは掛け軸とか、そういうものが教育史料としては当然入ってくるわけですね。ただ、私のそこらへんの情報は耳で知っているぐらいで、人前で喋るほどの情報がないため、旧制高等学校、大学等の関係を中心にさせていただきたいということです。さらには高等教育で、なおかつ教育というのは学校教育、家庭教育、社会教育と私たちは分けるんですが、その中で学校教育のほうが主なものだということです。

教育史料ということになりますと、教育史のほうでも、たとえば民間教育史料というのがありまして、古くからの産育の歴史とか子育てとか、そういうものも教育史料として位置づけようという動きがあります。あるいは教育運動ですね。戦前の新興教育研究所の問題とか、そういうものも結局は入ってくるんですけども、それらも今回は知っている限りでご質問があればお答えいたしますが、学校教育が中心だということで限定をさせていただきます。

全体として、私の頭の中が整理されていないため、どういうふうにご報告したらいいのか悩みました。時期別に、あるいは事項別に話したほうがいいのか。たとえば教育政策の文書はこういうものがあるとか教科書問題、あるいは明治期ではこんなものがあるとかいろいろ考えたんですが、最後の結論は、近代日本の教育関係史料を全体として誰も把握していないのではないか、という事でした。私のプロパーの大学・高等教育に限定すれば、それなりの話はできるかな、と思いました。

その中で、大きくご報告を3つに分けてみました。1つは機関別の話です。その中は

「公文書館など」、それから「学校文書」と言われるものです。

2つ目が「個人文書」です。ここはそれぞれの人の持っている文書の時期、それから対象ということで分けようかと思ったんですが、オーソドックスに時期別に挙げさせていただきました。

それから3つ目に「目録、紀要、資料集」ということでお話いたします。これは、1、2の原史料を持っている機関などがどういう目録などを出しているのかということです。ですから、実際的には目録、紀要、資料集というところから、それぞれの機関、個人文書というところにアプローチしていくことになるかなと思っております。

まず最初に「公文書館」です。ずいぶんスタンスが大構えなんですけども、在日・在外という形で書きました。在日一々要するに日本にある、いわば公文書館等の史料所在については、いくつかの機関を挙げておきました。戦前日本の教育行政、学校教育等は、「教育の勅令主義」と呼ばれ文部省の強い行政下に置かれておりまして、尚かつ許認可事項が多数ありました。学校を成り立たせている要素のかなりの部分が、文部省の権限、許認可事項になっておりました。その際の書類提出の手順が決められていました。文部省の直轄学校は直接的に文部省と交渉するんですが、その他の学校は所在地の都道府県を經由して出します。東京都の場合は都立の公文書館を經由して残っていく形になります。東京大学の場合は都道府県を經由しませんので、国立の公文書館に閣議関係史料、文部省公文書として残ります。なお、文部省公文書には私学関係も含まれています。

この中で直接的に関係するのは文部省文書です。ご存じのように、文部省の公文書は関東大震災によってほぼ壊滅しているというのが私たちの通説であります。それを補っているのが個人文書ですけれども、基本的に震災以前のものはないと考えられます。「考えられます」というのは、それは言い伝えだけでありまして、文書というのはえてしてどこかでポコッと残っていることがあるもので、「そう言われている」ということです。

文部省の公文書も、ほぼ何年かに分けて国立の公文書館に移管されております。昭和59年に2度目の移管が行われております。国立の公文書館には、閣議決定までを要した文書、太政類典、公文録、公分類聚などが残っております。文部省固有の許認可事項の書類については、震災以降の書類が49年と50年、2度に渡って公文書館に移管されたことによっで見られるようになっております。ある学校の学則とか施設の拡充等をご覧になりたいときは、いまはほぼ国立公文書館の文部省記録というのをご覧になると、一応のことはわかります。その中に、先ほど言いましたように震災以前の史料も残っております。これが、日本にある学校教育関係で機関別のものはいちばん大きい史料群です。

これ以外に府県の文書館史料が非常に整理等も行き届いています。これまで教育史の間は、足で史料を稼がない、県立の文書館までさがって、県の行政文書の中から教育事項を引き出すことは少なかったんですが、最近は若手が育ってきて足繁く通うようになりま

した。その中で、明治期のちょうど内閣制度の発足する前後の高等教育に関わる重要な史料が、たとえば埼玉県立の文書館に入っていたことがわかった。それは地方庁官会議のときに出された書類らしいんですね。教育史ではほとんど知られていなかった史料です。これらは学制関係、文部省系統としては出てこない史料なんですね。政策決定のことを考えると、長官会議とかが重要な役割を果たしているというのは知っているんですけども、その文書をめくって教育関係の公文書がその会議に配付されているかどうかというのは見なかったんですね。許認可事項の書類以外に、関連の部署にある史料の発掘の可能性が最近多くなってきた、かなり保存されていることが分かってきた、ということでもあります。

それからもうひとつ、「在外」で皆さんがすぐパッと思い浮かべるのが、GHQの戦後の文書だと思うんですね。国会図書館などにあるんですが、このほか日本の教育を考えるとき、特に中等・高等教育に関しては宗教系学校の担っていた部分が大きいんです。その宗教系学校というのは、日本では仏教、神道とかあるわけなんですけど、その中で大きな勢力キリスト教系の学校ですね。たとえば世界的規模の宗教団体は、世界戦略の中で日本を必ず位置づけて人間を出すわけですね。どういう人間を出すかというのも、当然その国に対する評価が込められるのは明らかなことです。最近になって、キリスト教系学校の百年という契機の中で、母教会伝道協会などが持っている史料を探し始めています。

私は立教学院125年史の編纂もお手伝いをさせていただいたのですが、立教学院の母教会はアメリカン・アングリカンチャーチー米国聖公会なんですけれども、そこには膨大なCHINA RECORDS、JAPAN RECORDS、という地域別の記録が残っております。これは宣教師が派遣先からマンスリー、アニュアルという形で報告をしたものなんですね。これまでの編纂レベルでは綺麗事の報告が引用されているんですけども、それらを逐一見なければ、「金がない、金がない。もっと送ってくれ」「野蛮な日本人」だとか、宣教師の率直な感想がずいぶん書かれているわけです。このように在外のミッション・ボード関係史料の存在が明らかになってきましたから、それを見ないでキリスト教系学校の創設期は書けないだろうと言われていきますね。東北学院の百年史というのは、ある方が1年半ぐらいアメリカに行って、教会の史料を多量に収集してきて、それを読みながら執筆したというんですね。その成果の一つは、始まったときの最初の生徒たちの名前が全部分かったということです。小さいことですけど、画期的なこと、なおかつ在外の史料が持っている重要性を如実に示しています。ほぼミッション系の学校は最近やりはじめたんじゃないでしようかね。たとえば、もっと直接的にキリスト教系の学校だけではなくて、たとえば福沢諭吉の慶応義塾も関係してきます。慶応の語学教育はアメリカ系の語学教育、アメリカ人による語学教育が主流になるんですけども、それ以前に英国国教会の人が英語教育を担っていたんです。あるとき学科を拡充することになり、新しい教師が欲しいと英国国教会の人がイングランドに手紙を出した。「早く人を送ってこい。そうすれば慶応義塾の英

語教育はわれわれのものになる」というようなことを書いてたんですけども、どうもイングランドのほうを送らなかったために、アメリカから招聘されてしまったということらしい。これがどうして分かったかという、イングランドにおける国教会史料から出てくるんですね。これ以前に刊行された『慶応義塾百年史』には全然出てこない史料です。それからもうひとつが、雇外国人教師などの個人文書です。モースとかフェノロサ、グリフィスとかモルレーとか、いろいろあります。これも一方で長い伝統がありますけども、それほど積み重ねられてはいない。雇外国人を語るときには、光と影に注目したいですね。在外にどんなご遺族がいて、どんな史料が残っているかということも当然出てくることであります。

伊藤 グリフィスの場合にいま具体的に名前が挙がりましたが、何か文書が？

中野 ええ、ラトガース大学に何千という文書が残っています（グリフィス・コレクション）。彼が持ち帰ったんだと思います。当然ですけど、史料は見る人によって価値が異なりますね。文部省ができる以前の、南校時代の教職員と生徒の集合写真が1枚ありまして、これがほぼ唯一の明治3年ころの写真なんですね。グリフィスの文書にもあり、ある本の表紙を飾っていたんですね。私は5年間ぐらいこの雑誌を傍らに置いていて、2つはまったく同じものだと思っていたんです。グリフィスが持ち帰ったのかと思っていたら、実は違っていたんです。人の位置がちょっとズレていたり、足の開き方が違うのが分かったんです。これに僕はすごく衝撃を受けました。「あ、原版が2つあるんだ」ということですね。これまでそれこそ「東京帝国大学五十年史」以来一度も疑ったことがなかった。ぜひ今度はラトガース大学に行ってその写真だけでももう1回見てこようと思います。こういう形で雇外国人が多く史料を持ち帰って残されています。

伊藤 ラトガース大学の文書は、目録があるんですか。

中野 あります。ラトガースはかなり前から知られておりまして、福井大学が中心になってグリフィスの文書目録を出しているんです。かなりコンタクトがあって、国際会議も開いています。

伊藤 すると、その目録は福井大学が作ったんですか。

中野 大学としてではないです。大学が協力しながら、福井にある日下部財団というところが『グリフィス文書目録稿』を作っています。

伊藤 それは東大百年史で持っています？

中野 持っています。いまならラトガース大学のホームページから検索できると思います。

2番目「学校」ということでお話しします。3つ挙げておきました。ひとつは大学のこと、2番目が旧制高校のこと、3番目がその他。

最初に戦前の国立総合大学について。普通には旧七帝大というんですけど、旧植民地も含めたほうが良いと思いますので旧九帝大です。北大は125年史編纂が昨年立ち上がりま

して、いずれ 125 年史が終わったあとはアーカイブズを作るだろう、史料館だろうという話を聞いております。「百年史」のときは、編纂終了後に、史料は事務局に返してしまったと聞いております。札幌農学校時代は北大でも別評価で、図書館北方文化資料室というところにもあります。たとえば戦時下の特研生の名簿とか文部省とのやりとりの公文書というのはそちらに入っていないんですね。現業のところに戻した。それが今度の 125 年史編纂で再び利用しなければならないので、出てくるだろうという予想です。

伊藤 それは大学事務当局が持っているということですね。

中野 移転等でちょっと焼いたという話は聞きましたけれども、全部なくなったという話は聞いていません。

東北大学は「百年史」編纂がここで立ち上がりました。東北大は「五十年史」編纂が終わったあとに記念資料室を作ったんです。記念資料室（現、史料館）は、日本で初めてユニヴァーシティ・アーカイブズを名乗りました。一般的には記念資料室が百年史を担うと、考えていましたけれども、百年史編集室を別に作ったんです。そこに講師と助手を 1 人ずつ張りつけました。ですから、2 頭立てで東北大学の公文書類の収集と整理が始められているということになります。

伊藤 2 頭立てというのは、どういう意味ですか。

中野 記念資料室のほうにも助手がいるんです。百年史編集室には、講師と助手がいるんです。

伊藤 両方でやっているわけですか。

中野 百年史編集室は記念資料室内にあります。資料室が恒常的に文書も集め、整理をしてオープンにしています。

伊藤 ポストが 1 つ増えてますよ。

中野 2 つです。東北大学は、公文書閲覧のガードが強く、難しいところでした。五十年史が終わったあと記念資料室が出来ましたので、五十年史を編纂するときに使った資料は、記念資料室に移管して管理を委ねられる、と一般的には考えることですね。しかしそのようにならなかった。東大百年史編纂の頃に、私も東北大学の事務局に「ぜひ見せてほしい」と言ったんですけども、決して倉庫には入れてくれなかった。「これだけです」という形で、該当の簿冊だけしか見せてくれないという状況がありました。百年史編纂がはじまって少しずつ、移管の手続きが進んできた、と聞き及んでます。

東大は、ほぼ百年史に出典を明示した資料は、全部オープンにしてきております。関心がまだ戦後には来ていないので、ほぼ明治・大正ぐらいの閲覧が多いです。名古屋大学も五十年史の終了後に資料室ができております。

伊藤 もうちょっと東大の話もしてください。

中野 配付資料を 3 つつけておきました。1 つは、「大学史と大学史資料」という、1997

年に東大が 120 周年事業の展示でやったときに『学問のアルケオロジー』という本の最後に補遺として書いたものです。ここに史料室所蔵の資料について記してあります。どうして補遺になったのかというと、企画の方が最初の頃は威勢よく「赤門の横の倉庫を何百万で改修して、ここに大学史史料を展示していこうじゃないか。中野君も頼むよ」と言っていたのに、お金がないというので企画がつぶれてしまった。そのため私の原稿の扱いも補遺になったというお粗末な顛末（笑）。そこに大学内の公文書の探し方みたいなことも含めて書いておきました。

2 枚目は「大学史編纂と史料の活性化」というので、岩波の『近代日本思想史大系』の月報に書いたものです。ここにいくつか個人文書も含め、史料室設置の経緯等を書きました。私にとってはじめて、史料室の現状と資料の概要を書いた短文であります。

もうひとつは、先ほど伊藤先生がご紹介してくれました、私が一応代表となっている近代日本教育史料研究会、実体はほとんどなんですけれども、の月刊誌「かわら版」です。これを毎月出してまして、今年で 153 号になりました。約 15 年間ぐらい刊行しているんでしょうか。初期の頃に「教育関係者の個人文書一覧」を作って掲載していました。このあと続けてやってくれなかったため 39 で終わってしまいました。どうしてこんなことを私がやったかという、この報告の趣旨にもありますように、教育者関係の資料・文書についての一覧なり目録がほとんどない状況でしたので、誰かちょっとこんなことをやってもいいんじゃないか、という素朴な動機でした。

東大の百年史のことをちょっとお話ししますと、いま現在私がおりますのは大学史史料室というところです。百年史編集室の後身になります。私は実質、東京大学史史料室の助手ですが、職員録には、東京大学史史料室という部署は特立されていません。どこにあるかという、総務部総務課広報室の下に大学史史料室があるんです。伊藤先生とも一緒になって大学史史料室を作ったときの経緯をいくら思い出しても分からないんですけれども、大学史史料室は東京大学が持っている「施設」という位置付けなのです。「東京大学規則集」を見ますと、「東京大学史史料室規則」はどこにあるかといいますと、実は「施設運用等」の項に入っているんです。ですから、「大講堂利用規則」と同じようなレベルで「東京大学史史料規則」があるんです。設置に際して、こういう位置付けになるというのは分からなかったですね。教官職を置くということだったので、史料室が研究調査的機能を担うというのは、きっと全員が思っていたんですね。思っていたけど、規則を作って、大学の機構のどこに位置づけるかという段になって気が付いたのは、史料室規則に「調査・研究」という文言が入ってなかったことです。史料室は百年史編集時代に集めた史料を保管して公開するということなんですね。

伊藤 東京大学のホームページに入っても見当たりませんか。

中野 ですから、広報室にぶらさげる形になるんです。総務課というところを開けない限

りは出てこないです（現在はトップページがあります）。

伊藤 そうですか（笑）。さっき職員録を一所懸命見ていたんだけどね。

中野 私の所属は教育学部になります。学部の軒先を借りているんです。

伊藤 じゃあ、総務課のほうにはあなたの名前はないんですか。

中野 ちゃんとあります。事務官を併任してますから。本籍は教育学部だよと書いてあるんです。ホームページ開設以前の史料室の対外認知は、百年史編纂時代から継続されて来ていますから、電話交換手の人に「古いことは史料室」という認識があり、質問などを回してくるので「あ、東大には史料室があるんだな」という程度でした。あとは口コミで来るという状態です。

昨年度から専任事務官が定削になりました。いまは専任は私1人です。事務補佐員の方が週5日きております。調査研究プロジェクトで教務補佐員として大学院学生の方をお願いしています。今年は週2日の方が3人です。

業務的には、発足当初に掲げましたこととそれほど大きく変わっておりません。いちばん大きい変化は調査研究プロジェクト方式です。吉川弘之総長時代に「学徒動員と学徒出陣」という調査を行いまして、4年間でプロジェクトを終えました。総長特別経費からお金をいただいて、アルバイトを雇ってプロジェクトをやっていくという形です。

史料室の存続にとってこれは重要な要素です。吉川総長時代に『東京大学における学徒動員・学徒出陣』（東大出版会）という本を出して、120周年のときには「年譜」を作りました。今年、ちょっと120周年が絡んでしまったのでスタートが遅れたんですが、蓮實総長が教養学部出身ということで「新制東京大学の成立」というプロジェクトを立てて、基本的な史料を集めて復刻していこうということをやっています。もうひとつは教養学部との関連で一高の史料です。業務的にはプロジェクト方式というのが大きく室の活動になっています。

伊藤 しかし、そのプロジェクトをやっている過程で史料も集まるということですね。

中野 そうです、はい。冗談みたいな話なんですけども、プロジェクトがないときにアルバイトを雇おうとすると「どうして？おまえがいるじゃないか」と言われました（笑）。

史料的には、いちばんこの間で大きいというか、室にとって今後の基礎になったのは、以前からお手伝い願っていた、大久保利謙先生から初期の東京大学の年報、一覧類の原本を寄贈していただいたことです。大学のいわば原文書以外の史料としては一覧、要覧類は基本になりますので、それがまとまって入ったということがあります。

学徒動員・学徒出陣の調査は大変でした。あの調査は、基本的なデータを集めようというのが趣旨で、聞き取り等は基本的にしませんでした。どうもいろんなところから「俺のところに聞きにこない」とか言った偉い先生もいたということなんです（笑）、個人の思い出、回顧などを当面控えて、データから最大限集めようということでやりました。そ

の中で、文学部の勤労働員の記録というのが出てきたんですね。これは東大十八史会の菱刈隆永先生という方が同じ会の蜷川寿恵先生の関係で持っていました。昭和18年から20年ぐらいまでにかけての文学部の学生たちの動員の記録なんです。20年9月にまとめられています。班別構成から、誰がどこに行ったとか、詳細な記録です。それが自分のところにあるけどどうしようということになって、私たちのほうに戴きました。タイプ印刷なものでちょっと字が滲み始めていたため、東京大学史紀要に復刻して残すことにしました（第17号）。

伊藤 それは誰が作った史料なんですか。

中野 そこに行った隊長の方です。すごく真面目な、哲学の先生とかおっしゃってたかな。

大学史史料室としては、あと忘れていたものもあると思いますが、そのくらいでしょうか。あとは伊藤先生も深く関わっていた「平賀文書」ですけども、平賀讓総長の文書は全部、史料室に来ました。9割方は艦船設計図とメモです。成蹊大学に行かれた三谷太一郎先生のお弟子さんが1人、平賀の史料を見たいということでいらしましたのでお願いして、1年半ぐらいかけてまず粗目録を作ってくれました。7月ぐらいには何千点の平賀の目録ができる予定になっております。

伊藤 艦船設計図も含めてですか。

中野 はい。メモ類から何から……。

小池 艦船設計図というと、福井文書ってありますよね。福井さんの文書は全部、艦船設計図を呉の海事博物館の設立準備所のところに入っていて、見てきました。そういうものですか、みたいな感じですけど、それも全部あって。ですから、最近ですよ。あれでプラモデルの戦艦大和が全部間違いだったというのが分かったというようなのがあるんですよ（笑）。

中野 実は呉からも平賀文書の寄贈を申し込まれています。しかし、海事博物館は専属の学芸員がまだ配置されていないですし、不確定ですね。呉が欲しているのは、平賀文書にある海軍マニア垂涎の軍艦の進水式の写真とか、観艦式の絵葉書など、展示に見栄えのものではないかと。

小池 渡さないほうがいいです。海事博物館はできない可能性が出てきましたから。

中野 そうでしょう。名古屋大学も恒常的に閲覧等の利用ができるようになっています。名大は戦災でかなり焼いていますので、公文書がごっそり資料室にあるという状況ではないです。評議会などの記事は充実しているようです。

伊藤 名古屋は個人文書を持っているんですか。

中野 あまり聞いてません。ほとんど聞いてないですね。

小池 飯島宗一氏が持っているのもありますよね。

中野 京都大学は百年史編纂中です。あと史料編3巻を残すばかりです。京都大の事務の

方はかなり熱心な方がいらっしやいまして、ここ1、2年で文書館へ移行するだろうと言われております。ですから百年史の、最終場面のときは編集と文書館の立ち上げとが平行するようなかたちで進むのではないかと考えております。

京都には関東大震災、戦災はないわけですから、三高の史料等を含めると、幕末維新からほぼ現在までの文書は全部揃っているはずです。舎密局からいま現在まで全部揃っていると思います。現在、編纂の途中なもので、文書目録は事務用にその部屋の間が持っているぐらいなもので、京都帝国大学以降の公文書がどういう形でどういう簿冊がどのくらいあるのかというのは、まだオープンになっていない状態です。

伊藤 昔、百年史の編纂のときに京都大学に行ったんだけど、すごい真っ暗な倉庫の中でウロウロただけで、中をよく見せてもらえなかった（笑）。

中野 みたいですね（笑）。ですから、よく言われるのは、「京都大学 70 年史」のとき、評議会の記録は執筆者だけにその該当箇所しか見せなかった、ということです。

伊藤 あのときは、あまりないという話だったんだけど。

中野 京大は百年史の編纂のときに、いろいろ個人文書も集めました。今回のメインは、初代総長の木下広次文書だと思います。明治 20 年代から 30 年代にかけての高等教育政策にかかわる史料は、牧野伸頭と井上毅に次ぐぐらいの文書と言っていると思います。長い間、木下広次文書はないと言われてきました。どうして木下文書が出てきたかという、アプローチの仕方がこれまでと違っていました。百年史編纂過程で、荒木寅三郎総長の文書が出てきたんです。その方のご遺族がたまたま木下広次のご遺族を知っていたんですね。「え、そんな人がいるんですか」という話になって木下家に行ってみたら、「実は家にあるんです」と言ってトランクにいっぱい入っていたんです。いま編纂中の史料編にも、ふんだんにこれは使われることになっております。大阪大学は、50 年史編纂で収集した諸資料を図書館にて保存されている、と聞いております。

九州大学に大学史料室があります。史料室には公文書が移管されていないと聞いております。ただ、「50 年史」以来のいろんな会議、委員会の記録をずっと持っているということです。大学史史料室は所蔵目録も作っております、アクセスの楽なところになっております。

伊藤 その目録は公開されているものですか。

中野 公開されています。2 冊。旧植民地の台湾帝国大学の史料は台湾大に残っていて、いま史料の復刻がおこなわれているということです。京城帝大、まのソウル大学には、学籍簿関係が残っているんじゃないかという話なんですね。京城帝大はソウル大学になるときに、ほかの専門学校も吸収します。そういう関係のものも残っているんじゃないかというような話を聞いております。朝鮮総督府の文書の中にもあるのではないかと思いますので、一応挙げておきました。

公立大学・私立大学の資料をと話していると永遠に続きますからやめましょうね。私立大学については、あとで必要なときにお話しいたします。

旧制高等学校の話をさせてください。旧制高等学校については、旧制高等学校記念館というのがありまして、ここに旧制高等学校の史料を集中していこうという動きが顕著にあります。実際的にはその動きはにぶいんですが、いわばキーステーションができたということなんですね。これは大学史資料と比較すると違うんです。単純なことをいいますと、大学史の場合は必ずその大学に文学部なり史学科なり教育学科なりがあるんですね。先生がいらっしゃる。そうすると、自分のところの史料は自分で抱えようということになる。逆に、設立主体を越えて大学史資料が全国にだいたいどのくらいあるのかなんていうのは、なかなか関心を持たれないというのが現状だと思うんです。ところが、旧制高等学校は廃校にされたため、後継者もないし増えないところなんですね。10数年前に、『旧制高等学校全書』の編纂が行われましたが、以後は研究者も少なくなっていました。自分たちはもうなくなる。後継者もなくなる。どこかきちっとしたところに史料を置いておかないと危ないというので、これができたんです。

伊藤 これは松本ですね。

中野 はい。毎年展示会なんかをしながら、少しずつ史料が入ってくるという形になる。旧制高等学校研究のメッカにしたいということをおっしゃっています。いずれは研究紀要とかそういうことをやりたいんだというふうにおっしゃっていて、ここ3年間は毎年8月の第1週に夏期セミナーを開催しています。セミナーの翌日に開かれる研究報告会もお手伝いさせてもらっているんですが、大学に比較してこういうキーステーションができたという意味は大きいんですが、なかなか人が集まってこないのが現状です。

季武 これは民間？

中野 松本市教育委員会の管轄です。

伊藤 その中心の人かなんかしらないけど、僕は一度ちょっと話を聞いて、愚痴を散々聞かされた記憶がありますが（笑）。

中野 お金とか、誰も集まらないとか。

伊藤 もう熱心な人がなかなかいない、ということですね。

小池 旧制高等学校といった場合、ナンバースクールだけじゃないでしょう？

中野 そうですね。

小池 たとえば広島高等学校とかありますが、たとえば後継がありますよね。広島高等学校だったら広島大学総合科学部だったりという形になって、うちにも広島大学の総合科学部に旧制高等学校関係の史料があるんです。そうすると、後継があると大学の史料という形に一応は、後継があるということでジンコウという形になりますよね。

中野 はい。

伊藤 だいたいそうじゃないんですか。東大の場合だって、一高の史料はなかなか手放してくれないけれども、さっきの話だとそれをやるような感じで聞こえたんですが、そうじゃないんですか。

中野 それは危機意識でやるんです。

小池 それはたとえば旧制高等学校記念館の立場に立てば、ある意味でそれを切り離して、それは新制大学なんだから違うんだということで切り離して、そちらに譲れということになりますよね。

中野 はい、そうです。ですから、大学史資料はいいんです。前身校、後身校の関係で旧制高等学校の史料があるから抱えるといいんですけど、実際はやらないです。年史編纂をやっている方たちは熱心に取り扱いますが、正直なところ、一旦終わったらもう執着しない。

小池 そうそう。前の広大の25年史もそうでしたから。

中野 旧制高等学校史料については記念館があるんだから、そこに移管してオープンにできるものはオープンにしていくほうがいいような気がしますね。もう一つの例は三高資料室なんです。三高資料室はぜひ一度行ってみてください。もうすごい立派です。幕末維新期以来の文書が全部残っています。帙に入れてきれいに残っているんです。

伊藤 それはどこですか。

中野 京大の総合人間学部。昔の教養部図書館にあるんです。このくらいの一室にズラッと入っています。神陵史の編纂をするときに整理されたものを、抱え込んでいるんです。あれだけのものをどこかがきちっとやっておけば、たとえば旧制高等学校記念館に行けば、もうメッカになりますよね。

伊藤 京大の百年史は関わってないわけですか。

中野 今度の京大の百年史は前史として扱いますけれども、その文書を新しくひっくり返してそこからやるということはしないようです。

伊藤 東大百年史のときは、一高の文書を使いたかったわけですよね。でも、いろいろ難関があつて（笑）。

中野 三高の資料はよく揃っています。これは大変なものだと思います。しかし、その他のナンバー・スクールの資料は区々たる状況というか、本当に展示用だけとか、ちゃんと作った目録を出すとかは行われていません。

伊藤 東大は、一高は？

中野 どうも大学と一高の関係は仲良くなかったというのは最初の話でしょうね。一体全体どのくらいの一高の史料が残っているのか、実はまだ私は把握していません。一高の史料は、駒場キャンパスに散在しています。一高の史料は記念館にも寄託されています。公印、護国旗、ガウンとかいろいろ行っちゃっているんですよ（笑）。史料室では現在、新

制東京大学の設立と一高の史料所在をどうにかはっきりしようと、いま動き始めているんです。

伊藤 わかりました。さっきのお話でたぶんそういうことだろうと思ったんです。

小池 でも、いまのお話だと、一高の史料は現実的に分かれちゃったんですよね。となると、取り返してということはもう不可能？

中野 分かりません。

小池 じゃあ、どういう分け方をしたかも分からないわけですね。

中野 分からないですよ。

伊藤 そもそも誰が管理していたのか分からないんでしょう？

中野 それが分からないんですよ……。

小池 だから、たとえば旧制広島高校の資料は一応後継だと称している総合科学部にあるんですよ。ところが、そのOBたちは総合科学部を自分たちの後継だなんて思っていないわけですね。そもそも広島高等学校のほうが文理大よりも偉かったんだとみんな思っているわけですから、それも教養部になって成れの果ての総合科学部になんか冗談じゃないという意見が非常に強くて、広島大学のOB会組織では尚志会というのがあるんですけど、そことも仲が悪いんですよ。だから、高等学校のいわゆるOB会があって、そこがけっこう持っていますよ。ですから、たぶんその系列が敗戦のどさくさに紛れてこっそり引き抜いていって、それが管理主体になっていて流れたということだと思うんです。

中野 教養の本部が持っているのは2種類だけなんです。ひとつは学籍簿。要するに成績簿ですね。これはやっぱり持っているんです。それからもうひとつは、教員の雇用関係の史料。

小池 人事記録ですね。

中野 これだけです。あとは、たとえば一高の教授会の記録とか文部省との往復とか、機関としてのいろんな文書があるじゃないですか。そういうのはほとんどない。

中見 たしか一高の同窓会というのが強力で、駒場のキャンパスの中に会館があった……

中野 持っています。同窓会館があるんです。

末武 同窓会館という、きつない会館ですけどね（笑）。

中見 たまたま私のところに旧制の一高に留学した外国人が客員教授に来ていたんですよ。そうしたら、ご紹介したらえらくそこが親切にしてくれて、しかもそのマネジメントみたいなのは、もうだいぶ前なんですよ、一高を出た東大教養学部の教授という人がかなり嘸んでいて、もうそういう人たちは今はいないわけですけど、結局最後の段階で大部分をその人たちがそっちに移したんじゃないですか。

中野 記念館にですか。

中見 ええ、一高の同窓会のほうにある時からどんどん移しちゃって、それを今度は旧制

高校記念館に持っていったんじゃないですかね。

中野 どうしてそれを同窓会にあげるんだらうというのが分からないんですよ（笑）。同窓会はかなりボランティアな組織ですので……

伊藤 公文書を持つわけがないんだなあ（笑）。

小池 でも、寮の問題がありますよね。広島大学もいろんな寮があるんですけど、その史料は大学にもあるんですが、なぜか同窓会のところにいっぱいあるんですね（笑）。

中野 だけど、わからないですねえ……。

ナンバーズクールだけで言うと、一高はそんな状態。仙台二高のはほとんどないという話です。あそこは同窓会は強いんです。強くて、東北大学の記念資料室を支えていますね。三高は、今いいましたような状態です。四高はあとでお話しします。最近、史料目録を作りました。五高は熊本にあって、当時の建物がそのまま残っています。ただ、資料の整理、保存をなさっているのは、篤志家の先生でありまして、その先生がお辞めになるなり亡くなったら、もう誰も手を付けないでしょう、というお話でした。展示資料以外にもたくさんありまして、旧制高等学校長会議の決議録とか大事なものが残っておりますね。岡山の高六はまったく分かりませんね。七高造士館もわからない。八高は名大資料室に照会したところによれば、戦災のため何もないところらしいです。

その他、開智学校と開明学校は必要ならご説明しますが……。

「個人文書」は「主に教育行政関係、私学にはこのほか創設者文書がある」と書いておきましたが、漏れ落ちがたくさんあると思います。明治期については、大木喬任、加藤弘之、森有礼、井上毅、木下広次、牧野伸顕というような文書があります。

伊藤 ついでに申し上げておきます。さっきのリストの中に樺山（資紀）、教育関係史料なしというふうになってますが、最近、樺山家から史料をショウユウクラブというところでもらいまして、調べてみましたらやっぱり文部省関係のもの、文部大臣時代のものがありました。いずれ公開する予定です。

ただ、憲政資料室に入ったと同じくらいかどうかは分かりませんが、相当膨大な量の文書が家の蔵の中に入って残されていたんです。

中野 いま言いました明治期は、先ほど配った教育関係の個人文書等に当然、重複しています。逆に私のほうで思うのは、明治期の文書については、こと高等教育に関しては、ぜひ伊藤先生にと昔から私は言っているんですけど、浜尾新の文書はないのでしょうか。僕は、きっと高等教育にとってはキー文書になるんじゃないかと思うぐらい、最近は思い入れが激しいです。しかしほとんど出てこないですね。

浜尾新の伝記はかなり前に、郷里の兵庫県豊岡から本が出版されました。慶応の学生が修士論文で浜尾新を書いたときに、浜尾家から少し史料を見せてもらったそうです。それを基本にして兵庫県の宿南保さんという人が『浜尾新』という伝記を書きました。

私の専門で言えば、帝国大学の成立は、ほぼ伊藤と森で語られるというのが常套でありまして、ここ何年間にわたってそれに異議を唱えてきて、ようやくその中で浜尾がけっこう大事な人間じゃないかということになったんですね。要するに、位置づけの仕方は思想史的ではなくて、内閣制度発足前後の行財政整理の中で日本の高等教育をどう発想するかというときに、浜尾がけっこうその点での力量を発揮したのではないかというような印象を改めて持っています。皆さんどうぞご協力のほどを。

伊藤 浜尾の子孫を当たったんじゃないんですか。

中野 ええ、百年史のときは当たりました。百年史が出来たので持っていくというふうに行ったら、「来ないでいい。送ってくればいい」と、二度ほどやって二度ほど「送っていい」と言われたのをまだ覚えております。

大正期は、水野直と手島精一です。手島精一文書は、いま東京工業大学の史料室に入っております。日記は蔵前工業会のほうがありまして、彼は「日本の実業教育の父」と言われていますけれども、当然、教育行政にもずいぶん関わっている人です。主に大正期の教育調査会史料を調査しているときに、東京工大で見つけて、マイクロ化して収めてあります。これはまだほとんど使われてない資料ですね。

昭和戦前期では、内田祥三――東京帝大の総長ですけど、「東大百年史」の戦時中の記述は、これなくしては書けなかったというぐらいに詳細な史料です。今度の『東京大学の学徒動員・学徒出陣』のときに作った史料は、ほぼここから取りました。

伊藤 まだ目録は出来てないんですか。

中野 目録は昔の状態のままです。戦時中の東京大学の、18年、19年、20年のオフィシャルレコードですけども、概要が掴める史料などもありますし、それが復刻できました。

それから、小池行松文書は伊藤先生が史料室のほうに入れてくれましたが、これもほとんど知られてないですね。教学局関係のけっこう興味深いものが多数あります。

それから3番目の清水義章文書。この文書は国立教育研究所に入っているものです。主に教学局の関係で、「国体の本義」とか「臣民の道」とか、そういう草稿類とか編纂材料も入っている史料であります。

有光次郎文書は憲政資料室に入っているわけなんですけど、文部省にとって有光次郎さんは特別な人で、文官高等試験に受かってストレートに文部省に任官した初めての人だそうです。それ以前はほぼみんな、内務省に一度行ってから文部省に来るということだったんですけども、この方は高等官で初めて文部省に来た。戦時中の日記から戦後の次官会議及び審議会等の史料があります。

石川準吉文書は、国家総動員関係の史料が国立教育研究所に清水文書と同じように入っています。

森戸辰男文書は、小池さんがいるので私は別に喋る必要はなくて、いまさかんに整理が

進んでいて、広大五十年史のメイン史料になるという噂を聞いております。

この他、昭和戦前期ですと、立教学院の遠山郁三総長の日記があります。戦時中のいわばキリスト教系学校、特に大学がどのような動きなりどういう問題があったのかというのを、かなり克明に記したものであります。小さなノートに万年筆でピシーッと書いてある史料です。以上が個人文書です。

最後に、目録・紀要・資料集について。目録は、先ほどいいました旧制高等学校の史料として最近できた新しいものをだけ持ってきました。第四高等学校関係史料リストです。小池さんからもお話がありましたように、ストレートに新制の大学と一対一で結びつき、尚かつ本部あるいは学部もいろんなところに実は関わるわけなんですね。この目録には、同窓会の持っている史料もあるし、金沢近代文学館の分もあるし、金沢大学本部がもっているものがあるし、それから法文学部がもっているものもあるんです。それを初めてまとめて出したんですね。こういう動きが少しずつ出てきています。

ただ、これは公開を前提にしていない史料目録です。もちろん作った人間たちは、出しちゃえば誰かが見たいとか何か言いに来たときに拒めなくなる。何しろオープンにしちゃっておいたほうがいいというので作ったらいいですけど、これは公開を前提にしない形で作られた目録としては、立派なものです。

それからもうひとつ、東北記念室（現、史料館）ですね。それが『仙台医学専門学校資料目録』であります。これが先ほど言いました「二頭立て」という要素なんですね。こういう地道な目録作成は記念資料室がやっている。一方で公文書を収集して百年史編集は直接、編纂室のほうで作るというかたちですね。東北大学も御他聞に漏れず戦後はいろんな学校を抱えこんだんですけれども、どうして仙台医学専門学校の目録が最初になったかという、魯迅のいたところだからなんですね（笑）。ここにある資料の一部は、魯迅研究会等がすでに先行して復刻しちゃっているんですね。全体像が明らかにならないままにずっときたので、ようやく記録を保存していくというプロジェクトの中に入れて、マイクロ化してオープンにするということになりました。

この目録は珍しく、なんでも目録に出したんですね。「なんでも」というのは、生徒名簿から入学願書、成績在学証明書、それから教官会議決議録、職員進退録、全部出しちゃったんです。これを作った人にあらためて確認したら、全部閲覧できます、と。「いいのですか、こんなの出して」と言いましたら、「原則としては全部公開です」（笑）と。

「もちろん閲覧申請の際、資料室側で内容をチェックして断るケースもありますが、可能な範囲で情報を提供しようとする方向性です」。これは画期的です。基本的には史料を管理するところが目録でオープンにしていくということの、これは1つの実績になっていくと思いますね。

それからあと2つ、旧制高等学校の話はあまり出ないので掲げておきました。『旧制高

等学校文庫目録』というのが、財団法人の大倉精神文化研究所から出ております。これはどうしてかといいますと、『旧制高等学校全書』という一時期、15年ぐらい前でしょいか、旧制高等学校研究のブームがありました。その編纂のために集められ、作成されたものが、大倉精神文化研究所に寄贈されて残っております。ただし、原文書はありません。コピーとか作成資料が中心です。ですから、たとえば旧制高等学校の学生数は何人いたんだろう、各旧制高等学校別の卒業生とか。そういうデータが欲しいときには、ここに行くと、きっとあります。基本的には副本、副資料ですけども、編綴されていますから使い勝手がいい目録になっているんです。どうして大倉精神文化研究所かといいますと、静岡高校出身の所功さんが口をきいて、大倉精神文化研究所で預かってもらうようにしたと聞いております。

もうひとつが、先ほど言いました記念館です。記念館所蔵のほうで目録が出ております。主には旧制松本高校の史料ですけども、ほかから寄贈された史料もあります。

それから紀要類、大学史関係の多くの紀要類が出されるようになりました。東大の百年史をやっているときに比べたら、それは雲泥の差であります。大袈裟に言えば、ひとつの分野を形成しているというほどに紀要類が出ております。ここに挙げたのは、古い早稲田、それから同志社。東大、神戸、名古屋、立命館と出しましたけれども、その他にもういっぱいあるんです。

伊藤 これは大学史の紀要ですか。

中野 大学史の紀要です。ですから、日本の大学史をやるときに、それこそ10年ぐらい前は、教育系なり歴史系の学部紀要、広大の大学教育研究センターの紀要、あと早稲田と東大ぐらいを見ていればいいという状況でした。現在は20ぐらい数えるんじゃないでしょうかね、それぞれ出しているのは。そこでは論文だけではなくて当然、史料の復刻とかも行われています。

資料集としては、来日メソジスト宣教師資料収集を持ってきました。先ほどいいました、機関別公文書の在外史料のうちの教会関係ですね。こういうのを青山学院なんかは作っているんです。これはメソジスト派宣教師の人たちの履歴とかを集めたものです。教会からの資料と在日の資料とを入れて、横断的に作っていくということですね。先ほどの話じゃないですけど、非常に重要な、在外につながるような資料目録、資料収集です。

伊藤 キリスト教文化研究センターというのがあるわけですね。

中野 そうです。総合研究所キリスト教文化研究センター研究叢書というプロジェクトとして作られたということです。

それから、資料集もいっぱいあります。今月中に『大学史をつくる』という本が出ますので、ぜひそれをお買い求めいただくと書いてあります。東信堂というところから出ます。

東京経済大学は百年史を始めまして、沿革資料を出し始めています。大学レベルあるい

は法人、小中高を含む学院全体がある種の記念事業をしようというときには、ほぼこういう資料集なりニュースなり紀要を出すというのが常態化してきている、普通になってきているとっていいと思います。東京経済大学は、以前も沿革資料を作っていたんですけど途中でやめて、あらためてやりはじめました。

伊藤 これは大倉でしたっけ。

中野 そうです。大倉喜八郎のところですよ。必ず資料を出していくというのが現状なんです。

最後は武蔵学園。『武蔵学園史年報』を出されております。大坪先生という熱心な方がいらっしやいまして、戦後の設置認可の文書とかを、復刻しております。武蔵学園は、旧制の七年制高等学校を母体に戦後、大学まで持ちます。私の関心でいいますと、この年報を突破口にして、出された本人はあまり意識してなかったんですけども、戦前の私立の七年制高等学校に、戦後ひとつの大学を作ろうという動きがあったことを知りました。敗戦直後の連合大学論です。ですから、たとえば学習院は文学部、武蔵は経済、成蹊はたとえば何々学部というような形で、単独で大学になれないから連合してやっという話があったんだそうです。これは面白い。これは通説では取り上げられていない。ただ、実際には失敗してしまう。で、結局はそれぞれが自分のところに大学を作ることになったんですが、まず戦後改革のときにこういう大学構想があった。これはGHQの指示ではなく、自分らで考えていこうという発想ですね。これは新しいものですね。それからもうひとつ、どうしてそんなことが考えられたかとなると、戦前から私立の七年制高等学校は、なにか合同会議をやっていたんだそうです。これも知らなかったですね。そうすると、私たちがこれまで見た目ですと、私立の七年制高等学校は分断されていたという印象を持っていました。スポーツとかなんかでの交流はあっただろうけど。でも、そうではなくて、設置された以降、恒常的にかよく分からないけど会議をしながら、あるいは戦時下をくぐり抜けてきて、戦後になってそういう形で連合大学論というのが出てきたというのは、高等教育史にとって新しい見方を提供すると思っています。

最後にひとつ、小池さんも参加しているんですけど、全国大学史資料協議会というのが設置されています。いま大学史編纂等をやるときに、私が呼ばれて話すことは、大学史編纂をするときに、あれはできなかった、これはできなかった、気がつかなかったというのは、ちょっと言えなくなってきました、ということです。編纂というのはもちろん研究上のこともありますけども、お金のこととか人事のことでいろいろ悩むわけですね。そういうときに、どういうふうに他の学校はクリアしてきたかとか、どんな悩みがあったのか、というのは、ここで情報交換をすることが出来るようになった。情報交換がよくなってきて、と同時に編纂のレベルも高くなるというんでしょうかね。変なものを作ると、手を抜いたな、ということが分かる状況になってきています。

小池 これに国立大学はこれまで入れなかったんですけど、広島大学はトップをだまぐらかしまして（笑）、国立大学として正式に機関として入ったののほうが最初なんです。

中野 最後のところに会員校と書いてありますね。東日本部会に西日本部会。だから、この大学は、ちょっと違うところがありますけど、ほぼこの事項の史料については、何らかのセクションなり情報を持っているというところでもあります。

伊藤 拓大も入っているんだなあ。

伊藤 それにしてはさっぱり分かってないんだな。

中野 活用なさってないんだと思います。

小池 見られると分かりますように、国立大学はありませんでしょう。国立大学はみんな個人的に入っているんですよ。

中野 そうなんです。

小池 苦労してみんな個人的に入っていて。

伊藤 （リーフレットの）見開き真ん中に、広島女学院歴史資料館とありますが、見たことありますか。

小池 ありません。僕は行ってないです。あることはあります。知っています。

伊藤 これを見ているだけでは、服装みたいなものがあるけど……

小池 史料はあまり持ってないですよ。いわゆる大学の史料は持っていますけど。この東西の全国大会の設営をやったのは、僕は1年目のときです。

中野 私の話はこのくらいで、あとはどうぞ質問してください。

伊藤 どうもありがとうございました。いろいろ質問したいことがたくさんあります。ひとつは、いくつかの文書について国立教育研究所が所蔵しているというお話がございましたが、国立教育研究所はそういうことに関心があるのでしょうか。

中野 個人文書を集めるという意味で、ですか。

伊藤 ええ。個人文書に限らず史料を集めるということに。

中野 関心はあると思います。あそこは図書館と教育史料室というのがあるんです。両方で集めていると思います。

伊藤 この間、戦後の教育刷新委員会の議事録が出版されましたが、あれはやっぱりこれに関わっているわけですか。

中野 国研としては関わってないです。

伊藤 国研の人が関わっているという。

中野 そうです。はい。

伊藤 あそこに貝塚さんがいるでしょう。あの人はそういうことに熱心な方ですか。

中野 貝塚さんも一応、教育史料のほうじゃないですか。彼の上にいるのが橋本昭彦さんという人で、その方は昌平坂学問所の関係の資料を集めています。いま府県教育史レベル

の資料のデータベース化をやっています。

伊藤 ここ自分で、ある程度の資料を持っているわけですね。

中野 持っています、国研は。

伊藤 じゃあ一度、貝塚さんと呼んで話を聞きましょう。

中野 そうですね。国立教育研究所の文書ということで。

伊藤 それと、さっき震災で文部省の資料がほとんどないというお話でしたが、ちょっと含みのあるような感じでしたね。僕も震災以前の文部省の史料は実はどこかにあるんじゃないかという話を聞いたことがあるんですが、何か根拠があるようなことはあるんですかね。

中野 資料がまったくなくなる、現実的に全部灰塵に帰したということはありませんと思うんです。たとえば東大で関東大震災のときに、附属図書館の蔵書は悉く灰塵に帰して70万冊だめになった。経済学部の「アダム・スミス文庫」もだめになったという話がありましたが、教職員が救い出していたんです。だから、庁舎が焼けたからといって、誰も茫然自失に手をこまねいて焼ける焼けるなんて思わないと思うんですよ。誰かがいて持ち出すとかね。

小池 実務記録は持ち出さないと大変なことになりますからね。

中野 たとえば金庫があるとか思うんですよ。と思うんですけども、佐藤秀夫さんに聞いても「いや、『ない』と俺も聞いているんだ」と言われております。

伊藤 佐藤氏はなるべく史料を見せないようにするという主義の方だと聞きましたけども。

中野 そんなことはない。

伊藤 今度、貝塚氏になったのでよかったのか、という話で（笑）。誰かがそんなことを言っていましたよ。

中野 ないという形で言われてきているけど、じゃあ本当はないのかということで、たとえば生き残っていた人が震災のときに全部亡くなったとかいう話も、文部省の座談会がたとえばあるじゃないですか。何十年史とか文部時報で、そんなときにも出てなかったような気もするんですけどね。焼けたと言いますけど。

伊藤 じゃあ、文部省の古い人にヒアリングをやらないといけないな。

小池 教育刷新委員会は、原本は文部省が持っているんですか。

中野 そうです、今度のは。

小池 今度、中央教育審議会の史料も出すみたいな話ですね。

中野 そうですね。

小池 ですから、これは42回に渡って公文書館に移管されたものは、昭和32年ぐらいまででしたっけ。そんなものですよ。

中野 そうです。いわゆる25、26年過ぎちょっとぐらいまでが入ったんですね。

小池 27年か28年ぐらいまで。ですから、そのあとのものも、あれはどのような公開の仕方なんですか。

中野 わかりません。

小池 だから、教育審議会の史料を全部出すと。それから、教育刷新委員会で出したというような形なんですけど、あれは教育刷新委員会に関しては、これは史料的に重要な価値があるからということで研究会を使って、これは出してくれと文部省が交渉して出したという形なんですか。

中野 そうですね。ただ、新しい時期の審議会記録も進んでいると同時に、実はその前の、たとえば大正期の臨時教育会議の史料とか教育審議会の史料は全部じゃないんですよ。公文書館にまだ入っているんです。

伊藤 それはどこが出さないんですか。

中野 公文書館でしょうか、文部省でしょうか。

伊藤 「未整理」というのね。

中野 そうです。

伊藤 臨時教育審議会は大正中期でしょう。震災の前だと思うんですが、そういう史料を持っていて、震災で全部焼けたというのは変だなと前から思っていたんですが。

末武 あれは文部省じゃないのかな。

伊藤 そうか、内閣直属か。

中野 そうですね。あと、文部省の公文書でいいますと、いまいけばん問題になっているのは、新制大学の認可申請書をなかなかオープンにしないということです。どうしてか理由は分からないんですけど、文部省は頑に拒むらしいです。

伊藤 今度は情報開示でやったら出さなきゃしょうがなくなるでしょう。

小池 だけど、有光次郎文書の片割れの中で非公開のものがありますよね。憲政資料室に山のようにありますよね。去年、学生と一緒に入ったときに、山のように、この部屋いっぱいぐらいあるんですよ。それは全部、設立申請なんです。アイカ学園とか、そんなのがドーンと並んでましたから、おや？ とか思って、これはどうされるのか。もう袋詰めにされてるんですよ。

伊藤 おそらく教員の資格審査やなんかのがあるから、まずいんでしょうね。

小池 書類でしょうね。プライバシーなんでしょうね。たしかにそれはまずいでしょうね。

季武 マル合って（笑）。

小池 マル合か非マル合かというのが分かっちゃうから。

中野 戦前に大学に認可された大学が戦後に申請を切り換える資料は出すんだそうです。

あ、違う、反対でしたっけね。

伊藤 なんかないのかな。

中野 戦後新たに大学として申請するのを見せないのかな。

伊藤 そうですか。

小池 有光文書の中にもたぶん……。ずっと大学設置関係の委員でしたから。彼は全部包んで配られたやつを全部持っているんですよ。それが憲政資料室にあったのを見たんです。

伊藤 憲政は独自の判断でそれを見せてないということですか。それとも文部省と協議をやったのかな。

小池 かもしれませんね。だけど、実際目録は、仮目録ができている状態だと思うんですよ。袋詰めされていて、憲政の袋に入っていて表題がついていましたから。

伊藤 とにかく有光さんという人は、何でも取ってある人だからね。あの整理はもう本当に難航を極めたわけですからけれども、もうとにかく審議会なりいろんなものに関わって、それを全部取ってあるんですよ。

小池 偉いですね。全部ありましたからね。それは設置審の関係の書類だけだと思いますよ、この部屋いっぱいぐらいあるのは。それは凄まじい量だと思います。20年代から30年代までずっとですものね。あることはあるんですよ、公開はしてないけど。

中野 それは複数部数作るはずですから、どこかから出てきてもいいはずですよ。

小池 だから、今度の教育刷新委員会の史料を出すのはありがたいんだけど、文部省のほうでこれは出す、これは出さない、何がある、何がない、ということがはっきり分からないのが……。逆に、出されることはありがたいけれども、じゃあ全体の中でどういう位置づけで出したのかというのは、今回の教育刷新委員会の解題を読んでいる限りでは、あんまりよく分からないと思いますよね。だから、中央教育審議会みたいな、どちらかという大臣直轄の審議会であったとしても、文部省本省の史料じゃないんです。もう、あれを公開として出していくのかなと。そうすると、文部行政に関わる史料は出さないで、あちらで出して情報公開ですり抜けようとしているのかな、みたいな気もするんです。

伊藤 しかし、情報公開でやってきたら、それはそうはいかなくなってくると思う。

小池 意志決定まで出さないといけないですからね。大学もそうですよね。大学の資料も2系列あって、評議会やら教授会なんかの決定の書類と、当然事務局が持っている資料もあるわけです。事務局で僕らに見せると言っているのは、ほとんどが審議会や評議会史料であって、総務部長とか経理部長なんていうのが持っている文部省との交渉関係は、その現用記録であると。いわゆる御手許文書として見せないですね。

伊藤 でも、これはいずれにしたって見せないわけにはいかないと思うんですよ。東大百年史のときに『文部省往復』というのがあったでしょう。

中野 はい。

伊藤 あの往復はずっとあとまで続くわけですか。

中野 そうです。昭和38年ぐらいまで、あの形で保存されているんです。

伊藤 じゃあ、そのあとはどうなるんですか。

中野 もう各課掛別になります。「文部省往復」という形でまとめでなくて、たとえば総務課なら総務課のどこかの必要な部署で保存するという形で。

伊藤 それはやっぱり文書規定が変わったということなんですかね。

中野 どうなんでしょうね。文書掛が廃止されたのはもっと後ですから、自主的に機能を、綴じ方を変えたということじゃないでしょうか。

伊藤 その文書ばかりや史料を集めて編綴をするわけでしょう。そういう機能をやらなくなったと。

中野 やらなくなったんだと思います。それぞれの課なり掛が持つ。

伊藤 それがかなり役所一般の、どこもみんなそんな感じがするんですよね。

中野 はい。

伊藤 だから、なんか規則が変わったか……。

中野 そうですね。

伊藤 それは今度、情報公開という問題が出てきて、非常にプラスの面もあるんですが、逆にちょっと危ない面もあるわけですね。

小池 あれは焼きますよ。僕が役人だったら、まずいものは焼いちゃいますよ。

伊藤 ないしは破棄すればいい。

小池 破棄しちゃってね。持っていても、これはないものだから。

梶田 38年に横書きにになったとき。

中野 そうです、その頃です。

伊藤 非常に危ないという感じがするんですが。

小池 あと、東大の法制史料センターの中に、東大の紛争のときに総長代行をやった人の史料が入っていたんです。

中野 加藤一郎さん。

小池 加藤一郎の史料とかがありますよね。ああいうものは、たとえば法制史料センターにあるよりは、本来的には大学史にあったほうが良いような史料ですかね。

中野 ええ。

小池 そういうものも、あれは寄贈経緯もあるんでしょうけど、たとえば大学史のほうではどういうふうな管理をするんですか。あるいはアクセスの仕方をするんですか。

中野 加藤さんの史料に紛争関係のありましたか？

小池 いや、紛争関係はあるかどうかは知らないけれども。

中野 総長関係のものの一部は史料室にあるんです。大したものじゃないです。

小池 ただ、向こうにあるのは相当な量だと聞いてましたけど。

中野 総長時代の、彼の手元にあった協議会などのファイルは史料室に入ってきています。

当時の坂井雄吉さんが分けられて、大学史関係のものはそっちで保存してくれと言って持っていらしたと思います。

小池 それ以外のものも山のようにあるということなんですか。

中野 でしょうね。

小池 それは、大阪市立大法学部の西川君のお友達でもあるんだけど、最近、戦後の経済改革の本を書いた中北浩司さんがあそこの助手をやっていたから、それで話を聞いたときには凄まじい量があると。量的には1万点を越えると言っていたんですよね。ですから、1万点を越えるとなると当然……と思っていたものですから。

中野 史料室へ来たのがかなり前なんです。もう十何年前ぐらい。

小池 そのときに整理をずっと続けていたんですかね。そのとき見た限りでは、記録があったというふうに聞いていましたから。

中野 じゃあ、まだ入っている可能性がありますね。

小池 まだ入っているんじゃないかなと思うんですよね。そうしたら、そっちのほうに入っちゃって、ということになるかもしれないとは思っていますけど。

中野 そうですね。

伊藤 なんてしたっけ。アメリカ研究センター……

中野 高木八尺文書。

伊藤 高木八尺文書の大学史に関わるようなものは貰うということで、たしか貰ったんですよね。

中野 貰っちゃいましたけど、現在再整理中です（笑）。

小池 まずいんですか。

伊藤 ただ、全部が閲覧停止になったわけじゃないんでしょう？

中野 一応保留にしようという状態です。

伊藤 全部……？

中野 一応の仮目録はあります。

伊藤 だけど、要するに問題がありそうなもの以外はオープンにするというあれではないんですか。

中野 いまはなってませんね。

伊藤 なってない。それは怪しからんな。

中見 東大の史料室に高木八尺文書の一部が来たのはいつですか。

中野 ずいぶん前ですね。

中見 私の家内がアメリカセンターで作ったんですよ。それは手書きなので。その前なのか、後なのか。

伊藤 そのときに、大学関係のものは……。

中見 うちの家内は国際関係のほうで頼まれて、本間長世氏から作ったんですよ。

中野 じゃあ、そのあとです、きっと。出来てましたから。

伊藤 それは、僕はあなたの奥さんと相談しながらやったことです（笑）。

中野 で、「どうぞどうぞ」と言われて目録を作った記録があります。ほぼ毎日行っていて。

中見 というのは、アメリカセンターにあったときは、アメリカセンター自体は厄介物みたいな感じだね。

伊藤 そうですよ。

中見 そんな、アーカイブだなんだっていう気はなかったんですよね。

中野 奥のほうに憲法改正委員会の記録がウワーツとあるんですよね。ああいうのは本当に、ここで持っていてどうするんだろうと思うぐらいに。

伊藤 そうですね。アメリカ研究センターもちょっと……。

小池 宝の山かもしれないね。

伊藤 けっこういろいろあるんですよ。

中見 それから木内の文書の一部もあそこに入ってるんですよね。

伊藤 木内文書は、今週の日曜日に木内さんの息子さんと一緒に個人で保管しておられまして、それを全部見せようというので行ってきます。そのこともあり、あなたの奥さんにちょっと相談しなきゃならないと思って、電話しようと思って電話する時間がなくて参っているんですけど。

たとえばこういうことをやっていると、本当にいろんなことが出てくるというのは、僕は陽明文庫の評議員をやっているんです。近衛の文章を本当はこっちの荻外荘を陽明文庫の分館にして、近代のものをこっちに持っていきたいという計画があるんですけども、なかなか資金問題でうまく動かない。それでワアワア、ワアワアやっているわけですけど、そうすると近衛さんから電話がかかってくる、「実はアメリカの独立戦争時代の史料をアメリカ人から寄贈するから陽明文庫に入れてくれと言われたんだけど、どんなもんだろうか」と言うから、「それはだってあなたね、独立戦争のときでは近衛と何も関係ない」って（笑）。だけど、とにかく向こうがどういうものなのか見てくれっていうんだけど、僕はいくらなんでもアメリカはちょっと無理だと。とにかくアメリカ研究の専門家を探しますからと言っていろんな人に聞いてみたんだけど、独立戦争の時代のことをやっている人なんて知らないと言われて、しょうがない、これは中見さんの奥さんに聞く以外ないなと思って。

中見 有賀先生だっけいいじゃないですか。

東大の史料をきょうは楽しみにして、個人的なことを言いたいと思ってね。ひとつは私が公務員になったときもまだその関心は依然として残っていて、在外研究に行くときは復

命書というのを書かされるんですよね。あれは明治とか東大のはだいたい残っていますか？

というのは、実は義和団事件とか日露戦争のときは東大教授が行って史料調査をやるんですよ。実は、いまの紫禁城に最初に入った学者は、東大教授の市村讚次郎なんです。それから伊東忠太がね。その一部は官報に載っていきまして、鳥居龍蔵なんて悪いやつで、戦争のところに常について行って調査をやるんですよね。そうすると、鳥居龍蔵が一部、官報にも載っていきまして、市村讚次郎は日本陸軍と一緒に紫禁城の中に入って、その文書庫を開けて見るんですよ。それで目録まで持ってきちゃうんですね。そのことは書いていたんですが、たぶんおそらく市村讚次郎が文部省に東京帝大の派遣で行ったので、帰ってきたら復命書を書いているはずなんです。そういうのはおそらく東大の書類の中にはどこかにファイルされていると思うんですが、そういうのは仮に私がたとえばお尋ねしていったとき、この年次のこの頃だというと、出てきますか？

中野 ないです。

中見 そんなものは。

中野 復命書はないです。

中見 つまり、文部省にあげた書類というような感じの中から。

中野 ないです。どうしてないのか分からないんです。構造として、要するに大学を経由して出すなり、学部を経由して出すなり、公文書の扱いだとどこかに痕跡が残ると思うんですね。しかし復命書は見たことないんです。いくつかそういう類似の質問を受けまして見たんですけど、まったくないんです。実際の書類の授受が分からないんですけど、ひょっとしたらそれは直接的に彼が、たとえば学部長なりの印をもらって文部省に出しちゃう。総長がたとえば前書きを付けて市村讚次郎のこの度の出張に対して復命書が出ましたので送ります、というような鑑をつけて出さない形式なのかなと思うんですけど、1回も見たことがないんです。

伊藤 それはどこからお金が出ているかによるんだと思うんですよ。

中見 派遣に関しては官報に載っているんですよ。

伊藤 それはどこの命によってなんですか。

中見 東京帝大。たしか内閣から発令が出ています。

伊藤 だったら、それは内閣ですね。

中野 本当に見たことがないですね。

伊藤 『文部省往復』があるわけだから、もしそれがあれば「復命書をお送りします」というのは必ず出てくるはずだと思います。

中見 たとえば戦前の帝大クラスのいわゆる在外研究には、みんな復命書が欠かせないんですよ。実は私は昭和 50 何年ぐらいですけど、そのときだって在外研究に行って帰ったと

きは紙切れ1枚ですけど、文部大臣宛に書かされたんですよ。おそらくこんなのは資料としてどこにも残ってないでしょうけれども、それでも慣習は続いていて、これだけ異動が激しくなるともう最近はやらないんですけどね。だから、それが仮に残っていたら、日本人学者の、たとえば理科の人でもドイツに留学してどうしたとか面白いと思うんですけど、じゃあそういうのは全然調査はできないんですか。

中野 はい。

伊藤 これはおそらく文部省なり……

中野 もうひとつは、その関連で言うと留学生のことなんですよ。実は留学生も明治から行って、必ず申請書を書くことになっているんですね。要するに自分はどこに行って誰の先生に勉強して、こんな科目を取ったって書いてあるんですよ。住所はどこだとか。それは規則で知っているんですけど、史料室に残っているのはほんの微々たるものです。

中見 そうしますと逆に、いまお勤めの東大の史料室に行った文書自体を、必ずしも教育史じゃなくてやるといっても、史料というのはやっぱり評議会の記録とか人事とか、ほとんどそういうものですか。

中野 史料室にあるやつですか、違います。逆に人事とか評議会の記録は見れません。

伊藤 永久保存のものは事務局が持っているわけです。

中野 ですから、たとえば文部省と往復して誰かが非常勤講師で行きたい願い書とか、そういうのは紙っぱらで来るんです。履歴書としてまとまっていないけど、個々の場面の処理についてはあるんですね。たとえば規則改正とか出張とかそういうものは残っています。それから講座開設理由書など。

中見 じゃあ、そういうルーティンワークの中の交換はあっても、たとえば具体的な研究に及ぶようなものとか、そういう報告書の類はほとんどそこにはないですか。

中野 研究の中身に関わるものはないです。

中見 なるほどね。学位やなんかのもの。

中野 学位はないです。これはもうまとまった本でしか探せないです。

伊藤 なんでそういうのが残らないんだろうな……。

中野 たとえば学位の場合ですと、学部教授会が審査するんです。それに対して意見をつけて本部に持っていくはずなんです。これを本部が上申する形になるんですね。普通は、ここで残って、取り次いだ事務が副本を作って出すということです。ところが、ここに残らないんですね。こっちのほうをもらったやつは、認可しちゃうときっと破棄するんだと思うんです。だから、外国の人なんか聞かれると、学位を授与した人には必ず主と副査がいて、理由書をつけるだろうと言うんですね。いまでも付けるんですか。

伊藤 付けますよ。

中野 それがほとんどないんです。まったくないです。

伊藤 だって今は博士論文の審査記録というのは、本になって公開されるわけですよ。

中見 電話帳みたいなものが。

中野 その元があるはずでしょう。それが無いんです。だから、学務課も結局取り次ぐだけでそれをそのままやっちゃって、学部で持っているのかどうか、分からないですね。

中見 ついでだから、ご参考までにお話をしておきたいと思います。

きょうは帝国大学中心史観で専門学校なぞ相手にされなくて、実は私が最後にしている学校は東京外国語大学という奇妙な学校でして。ちなみに国立大学協会の中に特大協というのがあるのをご存じでしょうか。特殊大学協会。東京外語、大阪外語、東京水産大学、帯広畜産大学、東京芸術大学、そういう特殊な学校で、歴代の会長は東京外語大学の学長がやるという。ご存じないでしょう。

これはある意味で面白いんですね。東京水産大学とか東京外語大学って、特殊な分野の専門家とか中堅実務家を養成する学校で、たとえば東京外語大学史なんていうのは、日本における英語教育だとかアラビア語教育とか、そういうものなんですね。東京外語大というのは、もともと東大と一緒にいたのが分離されて一橋に入って、また戻して、実は再び仕切り直して今年が百年なんです。ところが突然学長が変わりまして某中国大家がなっちゃったら、もっと古いはずだということで、開学百何十何年、創立百年という奇妙な運動を始めて、いま大学公史を編纂して……。ご存じですか。

中野 はい。知ってます。山本さんという方がなさっていると。

中見 山本さんって事務官の？

中野 はい。

中見 彼はA・A研の事務長だったんですけど、その第1弾として去年、見るに耐えない資料集を作ったと。写真集。もう史料がてんでんバラバラでめちゃくちゃだというんですね。きょうのお話を聞いて、やっぱりこういうのをやろうと思ったら、ちゃんとした歴史家がいてある程度やらないと、よほど無理だなと。ああ、この学校は……。私は研究所なもので関係ないですけど、本当にひどいなと思って（笑）。ところが、文書自体もあれで、そしてまさに山本氏はうちの事務長をやっていたものだから聞いて。なぜかという、川島浪速というのが東京外国語大学を卒業しているんですね。それと二葉亭四迷が同級で、二人で北京に行って放蕩無頼の生活をしてやると。そうしたら、山本さんは昔、私は二葉亭四迷は長谷川辰之助というんですが、あれの在籍簿を見たというんですよ。それは僕は川島浪速の在学中の現職の教官は、実はそれを見れるんですよ。在籍簿はね。ですから、私はその特権を使って見ようと思ったら、山本さんがえらく熱心に探してくれたんですけど行方不明になっちゃっているんですね。ですから、本当に学校でもそういう教員の意識の低いところは本当にだめですね。おそらく外語大のは在籍録ぐらいしか残ってないですね。これは在籍といっても、百年前のからそのもっと前の、いわゆる最初に東京外国語学校の

一橋に持っていかれちゃったのは行方不明になって分からないし、ゴチャゴチャになって
いると言うんですね。ですから、同窓会名簿ですらほとんどない。

それから、百年史を見てましても、東京外国語大学ぐらいのレベルだと学校でつくるだ
けの予算がなくて、同窓会がお金を出して作っちゃうんです。だから、広島大学なんてま
ともだと思うんですよ。あんなのはおそらく終わったとしても、作れば面白い日本におけ
る外国語教育やら、地域専門家の養成の歴史が書けるはずだけど、まず書く人にそれだけ
の能力がある人は誰もついていない。われわれは絶対手を出さない、余所のことだからと
いうセクシュアリズムがありますでしょう。だから、これはできないですよ。同窓会がお
金を出して、同窓会の人の変な思い出話みたいな形で作っちゃって、終わったら史料はも
うでんでんバラバラ、みんな持って行っちゃう。たぶん、おそらく旧ニキ校あたりの学校
だと、その程度のレベルだと思いますね。

中野 でも、東京外大は昭和4年ぐらいに素晴らしい沿革史を作っているんですよ。

中見 それもまた、捜し出したら出てきたとか。

中野 あれ以降、外語大の史料がなくなったって聞いてないから、どこか移転とか改築か
なんかで流れたんでしょうかね。

中見 戦争で焼けたりしているって。だから、名簿ですら全部揃ってないって言ってい
ましたよ。

中野 東京外大は百年史をやっているって聞いていたんですけど、何のお話もないし、こ
ちらからしゃしゃり出て「何をやってます？」なんて聞けませんでした。

中見 変なアルバム形式の写真資料集みたいなのが、初期の外国人の先生とかね。だいた
いモンゴル語学科という奇妙な学科があるんですが、これがいつできたかさえもはっきり
分からないんですよ。つまり、告示で出てくるのは分かるんだけど、その前からどうもあ
ったらしいんですね、中国語の一部として。その先生が満蒙独立運動に参加して、外務省
記録に出てくる。それは私が見ただけの話なんですけどね。だから、さっぱり分からない
です。初期の中国語の先生というのは、要するに清朝の八旗の満州人を連れてきたり、初
期のヒンディー語は、インド革命運動の活動家みたいな人だったとかね。それはそれで面
白いんですよ。その地域になぜ日本人が関心を持って、そういう実務家を養成するかと。
書けば面白い。おそらく水産大学だって、水産の日本における発達史と実務教育と連動す
るでしょう。もっと典型的なのは音楽、東京芸大だと思えますよ。日本における音楽学
校の発展と、伊沢周二だなんだって。そういうのは面白いはずなだけで、やっぱり人を
得ないとなかなかね。それから、東京芸大はおそらく逆の意味では保存する気はあるで
しょうね。いろんな形で史料を。

中野 奏楽堂に何か残っているという話は聞いていますけどね。

中見 けども、それ以外の、たとえば東京水産大学とか東京商船大学なんていったら、

おそらくほとんど望み薄だと思いますね。

中野 商船大学は影山さんという方が書いてますね。

東京外大は、機関として学校史を書くというようなスタンスでやっていると、史料がないと何も書けなくなると思うんですけど、明治30年代ぐらいまでは「学校」という枠だけにこだわらないで書いたらきっと面白いんですよ。要するに、あそこに入ってちゃんと勉強して卒業しているという感じの青年は、逆におかしいような気がするんです（笑）。ちょこっと行ってロシア語をちょっとかじって、ワアワアッてやって、ブラブラ遊びながら出て行っちゃう。そういうのが有象無象いて、わけのわからないときにモンゴル語ができたりといったことが、きっとあったと思うんですね。それをいまみたいな規則とか何かで追うよりは、いろんな回顧録とか新聞記事とかで浮かび上がってくるその像のほうが面白い気がするんです。

中見 まさにおっしゃる通りで、それを高野静子さんというのが島田翰のあれでやって、そのときに問い合わせをされたんだけど、結局もう全然わからない。それから、藤井昇三さんて東大の中国文学の人が『東京外語』という本を書いたのも、史料的には全然結果的に追えなかった。ないし分からないし、来ても分からないと。だけど、あそこに書かれているのは、まさにいまに続く外語大、外国語学の体質だなと思って大いに感心いたしましたけどね（笑）。

中野 史実をきちっと規則を並べて学科課程を押さえて、人事の記録を1日も間違えずに明らかにするという方法だけではなく、時期によってはそういう書き方があってもいいような気がしますね。

中見 だから、規則によってフォローできる性格の学校と、逸脱型の人材や学校ってあるんじゃないですか。だから、たとえば私立大学でも、それこそ東洋大学とか拓殖大学なんていうのは、おそらく規則でやっていったって全然面白いのは書けないでしょうね。逆に東大とか京大とか、一橋とか東京工大みたいなのは、その意味では規則で追って、ある程度の動きはフォローできる。

中野 いや、そうでもないですよ。

中見 逆に言うと、つまらない学校だと言えるんですよ。広島高師なんていうのも、そうなんじゃないですか。

小池 それはそうでしょうね。でも、教育系のところは一般の大学とほぼ変わらない。もっとちんまりしていて、いじましい大学——いじましいなんて言っちゃ悪いですけど、慎ましやかですよ。ただ、旧文理大は東大よりももっと酷くて、戦前は国体学もありましたから、そういう点ではすぐなくなくなって、校旗の色を赤にしようとかそういうふうに変わる大学ですから、変わり身が早いんですけどね。

中見 なかなかそういう意味ではコウシは面白いんでね。天理大学史とか仏教大学史とか

いったら、書き手に人を得れば非常に面白いものができると思いますね。かえって普通の学校よりもね。

中野 そうですね。

伊藤 大学史の史料は、周辺はずっと政治史になったり文化史になったり、軍艦になったりということですから、教育だけということはずまないと思うんですね。そういう意味では日本近代の重要な史料の一部であるし、それはほかとも共通になる。こういう感じだと思うんです。ここに挙げられている、たとえば井上毅にしたって牧野伸顕だって、加藤弘之だってそうでしょう。内田さんは結局、建築のほうに行ったんでしょう？

中野 帝都復興関係は都の公文書館に移管されました。

伊藤 平賀文書の軍艦はどこもないから、結局全部引き受けたと。（笑）こういうことですね。

小池 建築関係の史料は、工学部なんですか。

伊藤 建築学科に。

小池 それは建築学科が保存するんですか。

中野 そうです。帝都復興が都立の公文書館に。

伊藤 だから、そういう文書がどこにどういうふうに分かれたりしたかというのは、ちゃんと把握できないと非常に困ったことになるわけで、それを研究会はやろうという話です。だから、本当はいま東大の大学史史料室だけではちょっとだめなんです。各研究室は、けっこういろんなものを持っていたりしているわけですね。

中野 そうですね、ええ。

小池 そこで調査をさせて目録を出させるようなことは、ないんですか。

伊藤 いや、そんなのは百年史を作っているときだっているいろんなことを手を尽くしてるのに、やっぱりセクショナリズムというか、それ以前に面倒臭いと。だいたいその学科は自分たちの学科の歴史を、何を持っているのかというのを分かってないんですよ。

中野 そうみたいですよね。

伊藤 とにかくどこかに何か端のほうに積んであるらしいとか、そういうことですから。まあ、国史学科だってそうなんですから（笑）。

小池 広島大学では、工学部だけはしっかりしているんですよ。専門学校のときの流れがありますから、と言って、そういうのを代々きれいに整理しているようなところもあれば、全部捨てちゃったとかいうようなところもあるんですよ。面白いですね。

中野 ひとつ忘れまして。歴代総長の文書で言うと、最近、古在由直の文書が入りました。量的には少ないんですけど、書簡若干と彼の草稿類が入りました。古在文書は哲学者の古在由重さんが持っていたんだそうです。由重さんが由直伝を書こうと思って持っていたそうです。由重さんが亡くなって、蔵書を整理している人たちが、ごっそり古在由直の分が

出てきて、これは何だという話になって、いろいろ聞いたらそういう形で持ってきてたらしいと。それでご子息の古在由秀さんが人事課の人に相談したら、人事課の人が史料室を知っていて、「そういうのは史料室がありますよ」となって寄託していただいたんです。由秀さんは東大百年史のときに東京天文台の編集委員でした。それで去年入りました。

伊藤 外山正一の史料は東京大学附属図書館と書いてありますね。これはたしかわれわれは見たはずだと思いますが、史料編纂所で持っていたのは何でしたっけ。

中野 渡辺洪基です。大学関係は史料室に来ました。

伊藤 移したんですか。

中野 移管しました。

伊藤 渡辺洪基の文書が史料編纂所にあるということも、あんまり知られてはないんですよ。ありがとうございました。

(終わり)